

# 令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

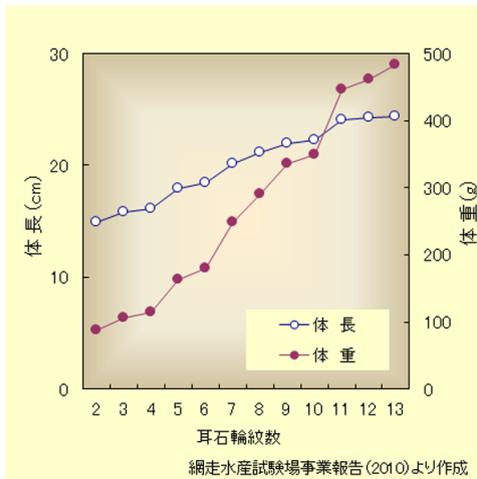
系群名 オホーツク海系群

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 太平洋北部では20歳程度だが、本系群では不明  
成熟開始年齢： 不明  
産卵期・産卵場： 産卵盛期は4～5月、産卵場は不明  
食性： 魚類、クモヒトデ類など  
捕食者： 不明

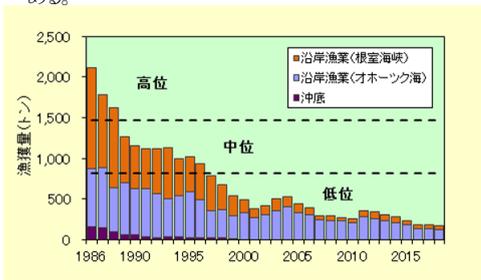


## 漁業の特徴

はえ縄、刺網(併せて沿岸漁業)と沖合底びき網漁業(沖底)により周年漁獲される。1996年以降、オホーツク海において、ロシア漁船がキチジを漁獲しているとみられるが、漁獲実態は不明である。

## 漁獲の動向

1986年に2,000トンを超えていた漁獲量は、2001年には375トンまで減少した。その後増加し、2004年には533トンとなったが、再び減少し、2018年は175トンであった。オホーツク海と根室海峡、沖底と沿岸漁業のどの海域、漁業においても、漁獲量は長期的に減少傾向にある。特に、沖底は近年ほとんど漁獲していない。ロシアの漁獲量は不明である。



## 資源評価法

長期間のデータがそろっている1986～2018年の総漁獲量の推移に基づき、資源水準を判断した。オホーツク海におけるはえ縄漁業の2001～2018年の操業隻数は、ゆるやかに減少しながらも2～4隻と安定していることから、はえ縄漁業の操業隻数あたりの漁獲量(CPUE)を資源量指標値として資源動向を判断した。

## 資源状態

過去33年間(1986～2018年)の漁獲量の最高値～最低値を3等分し、上から高位、中位、低位とした。2018年の資源水準は低位、また、最近5年間(2014～2018年)の資源量指標値の推移から、動向は減少と判断した。



## 管理方策

資源水準、および資源量指標値に合わせて漁獲を行うことを管理方策として、2020年ABCを算定した。本資源の資源状態は低い水準にあると考えられるが、漁獲量とともに操業隻数が減少し、資源状態を判断するための情報も限定的になりつつある。精度の高い資源評価にむけて、生態・資源調査の充実を図るとともに、ロシア船を含めた漁業実態の把握に努める必要がある。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値 からの増減%)
0.7・Cave3-yr・1.15	Target	110	—	—
	Limit	140	—	—

- ABC算定規則2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の回復が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ とし、係数 $\alpha$ は標準値0.8
- $\delta_1$ は0.7(低位水準における推奨値)
- $\gamma_1(1.15)$ は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算した。kは標準値の1.0とし、b(2.50)と(16.33)は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2016~2018年))である
- Cave3-yrは、2016~2018年の平均漁獲量
- 2020年ABCは、10トン未満を四捨五入して表示

**資源評価のまとめ**

- 資源水準は低位、動向は減少

**管理方策のまとめ**

- 資源水準、および資源量指標値に合わせて漁獲を行うことを管理方策として2020年ABCを算定した
- 精度の高い資源評価にむけて、生態・資源調査の充実を図るとともに、ロシア船を含めた漁業実態の把握に努める必要がある

執筆者: 濱津友紀・岡本 俊・境 磨

資源評価は毎年更新されます。